東日本大震災小児医療復興新生事務局代表
岩手県医師支援推進室　医師支援推進担当課長
菊地宏明

東日本大震災小児医療復興新生事務局の総合窓口と岩手県担当を務める、岩手県医師支援推進室の菊地と申します。

東日本大震災津波から 11 年余が経過しました。

これまで、全国各地から、被災地のために多くの医師の皆様に御支援賜りましたことにつきまして、改めまして深く感謝いたしますとともに厚く御礼申し上げます。また、当事務局の事業に御支援くださっている皆様に対しましても改めて感謝を申し上げます。

岩手県では、東日本大震災津波からの復興を最重要課題と位置付け、国内外から頂いた多くの御支援を力に、県民一丸となって復興に取り組んできました。昨年 12 月には三陸の復興道路が全線開通し、新たな高規格道路ネットワークが構築され、沿岸が一つになり、沿岸と内陸が一つになり、岩手県が一つになりました。復興は着実に進み、より大きな希望が持てるようになっています。

一方で、被災地などでは、依然として深刻な医師不足が続いており、地域医療を取り巻く環境がさらに厳しさを増してきております。

全国の小児科医の皆様におかれましては、このような被災地の事情を御考慮いただき、今後とも、「ほそくながく」御支援いただきますよう、よろしくお願いいたします。

2022.5.12

東日本大震災小児医療復興新生事務局代表
岩手県医師支援推進室　医師支援推進担当課長
山﨑 重信

東日本大震災の発災から 10 年を迎えるにあたり、改めて犠牲になられた方々に哀悼の意を表しますとともに、被災した皆様に対しお見舞いを申し上げます。また、当事務局の事業に御支援くださっている皆様に対しましても改めて感謝を申し上げます。

未曽有の大災害から 10 年。被災地では目に見えて復興が進みました。岩手県では災害公営住宅はすべて完成し、応急仮設住宅の全ての入居者がやっと恒久的な住宅に移行できる見通しとなりました。復興道路は順次開通し、年内には全区間の開通が見込まれています。

一方で、突然家族を失った悲しみが深く心のケアが必要な被災者や、移転先のコミュニティになじめずに孤立しがちな被災者などに対して寄り添った支援がまだまだ必要です。医療に関しても、病院は再建されましたが、医師不足とりわけ小児科医の不足は地域に暗い影を落としています。

震災により被災地の人口減少・少子化はますます加速し、復興の先の未来を担う子ども達は大切な地域の宝です。被災地に心を寄せ、支援してくださる小児科医の先生方は、地域にとって復興を支えてくださる希望の光となっています。

今はコロナ禍で厳しい現状もありますが、子どもたちが健やかに成長できるよう「ほそくながく」取り組んでまいりますので、今後とも本事業への御支援をよろしくお願いいたします。

2021.3.11

東日本大震災小児医療復興新生事務局の総合窓口と岩手県担当を務める、岩手県医師支援推進室の山﨑と申します。

東日本大震災津波から９年余が経過しました。

これまでの全国各地の医師の皆様の御支援は、被災地の子ども達とその親御さん、そして地域医療を支える医療関係者にとって、どんなに心強く、安心感をもたらしたか図り知れません。改めて心から感謝申し上げます。

私が所属する岩手県では、県の総合計画である「いわて県民計画 2019-2028」の実施計画である「復興推進プラン」に基づき復興の取組を進めています。

被災者の住宅再建では、年内には全ての災害公営住宅が完成し、年度内には全ての宅地が供給され、順次住宅が再建される見通しです。復興道路等も、年度内には全線開通する見込みであり、

平成 31 年３月に８年ぶりに運行再開しながら同年 10 月の台風 19 号で再び被災した三陸鉄道も、本年３月 20 日には全線運行を再開しました。

一方で、被災された方々のこころのケア、住宅再建支援、生活再建先でのコミュニティ形成支援など、きめ細かい取組がこれからも一層重要となっています。

被災地では少子化が進み人口がどんどん減少しています。そのため、被災地で生活再建された方はもとより、内陸や県外への避難を余儀なくされた方が生まれ育った故郷に戻り、安心して子どもを産み育てられる環境づくりが必要です。その意味でも小児医療の充実は極めて重要な課題であり、被災地の復興のために不可欠なものです。

全国の小児科医の皆様におかれましては、このような被災地の事情を御考慮いただき、今後とも、「ほそくながく」御支援いただきますよう、どうかよろしくお願いいたします。

最後に、本事業の実施に当たり、日本小児科学会及び日本小児救急医学会並びに日本小児救急医学会災害医療委員会東日本大震災継続支援ＷＧの関係者及び関係各位の御理解と御協力に対し、深く感謝いたしますとともに厚く御礼申し上げます。

2020.4.13

東日本大震災小児医療復興新生事務局代表
岩手県医師支援推進室　医師支援推進担当課長
髙橋新吾

東日本大震災小児医療復興新生事務局の総合窓口と岩手県担当を務める、岩手県医師支援推進室の高橋と申します。

東日本大震災津波から８年余が経過しました。

これまで、全国各地から、被災地のために御支援いただいた多くの小児科医をはじめとする医師の皆様に心から感謝申し上げます。

私が所属する岩手県では、平成 23 年８月に策定した「岩手県東日本大震災津波復興基本計画」の計画期間が満了し、新たに策定した県の総合計画である「いわて県民計画 2019-2028」に統合したうえで、同計画の実施計画である「復興推進プラン」において、震災伝承の取組と震災情報発信の取組を新たに加え、復興事業を継続することとなり、引き続き、被災者の方々一人一人に寄り添った支援を行いながら、復興を進めていくこととしております。

これまでの取組により、復興道路については、東北横断自動車道釜石秋田線が本年３月に全線開通し、内陸部と沿岸部が高速道路網で結ばれました。さらに、沿岸部の高規格道路である三陸沿岸道路においては、大槌町の一部区間を除き、宮古市から陸前高田市までの南半分の区間が、完成しました。

また、土地区画整理事業等の市町村の復興まちづくりでは、全体の８割以上の宅地が供給され、災害公営住宅も整備予定戸数の 95%が完了するなど基盤整備が進んでいます。

震災により被災した県立病院については、平成 28 年度に開院した県立大槌病院、県立山田病院に続き、平成 30 年３月の県立高田病院の完成によりすべての県立病院の復旧が完了したところです。

しかしながら、震災から８年を経た今も、応急仮設住宅や民間アパート等のみなし仮設住宅に、本年３月末現在で 2,113 人の方が入居しており、被災地の医療は、一層、重要性を増しているところです。

特にも、小児医療については、震災当時、子供に適切な医療を受けさせるなどの理由により内陸部の市町村に避難し、その後定住する方もおり、沿岸部はもちろん、内陸部の児童生徒にも心のケアが必要な方がいるなど、被災地の復興には、安心して子育てできる生活環境の構築が不可欠であり、小児医療の充実は、復興まちづくりの中心的な課題であると思っております。

全国の小児科医の皆様におかれましては、被災地の事情を御考慮いただき、引き続き、

「ほそくながく」御支援いただきますよう、よろしくお願いいたします。

併せて、ぜひ一度、被災地にお越しいただき、復興していくまちの姿を御覧いただければ幸いに存じます。

最後に、本事業の実施に当たり、日本小児科学会及び日本小児救急医学会並びに日本小児救急医学会災害医療委員会東日本大震災継続支援ＷＧの関係者及び関係各位の御理解と御協力に対し、深く感謝いたしますとともに厚く御礼申し上げます。

2019.04.19

東日本大震災小児医療復興新生事務局の総合窓口と岩手県担当を務める、岩手県医師支援推進室の高橋と申します。

東日本大震災津波から７年余が経過しました。

これまで、全国各地から、被災地のために御支援いただいた多くの医師の皆様に、心から感謝申し上げます。

私が所属する岩手県では、平成 23 年８月に「岩手県東日本大震災津波復興基本計画」を策定し、現在の第３期復興実施計画（平成 29・30 年度）では、被災者の方々一人一人に寄り添った支援を行いながら、復興を推進しています。

具体的には、復興道路として整備する高規格道路は、事業化延長 359 ㎞のうち本年３月末で 176 ㎞が整備されたほか、土地区画整理事業等の市町村の復興まちづくりでは、全体の約７割の宅地が供給されています。また、災害公営住宅については、整備予定戸数の約９割が完了するなど基盤整備が進んでいます。

震災により被災した県立病院については、平成 28 年度に開院した県立大槌、県立山田病院に続き、本年３月の県立高田病院の完成によりすべての県立病院の復旧が完了したところです。

しかしながら、いまだに応急仮設住宅や民間アパート等のみなし仮設住宅に、本年３月末現在で 6,857 人の方が入居しており、被災地の医療は、一層、重要性を増しているところです。

特にも、小児医療については、震災当時、子供に適切な医療を受けさせるなどの理由により内陸の市町村に避難した方が多くいるため、人口減少に拍車がかかっている状況です。被災地の復興には、安心して子育てできる生活環境の構築が不可欠であり、小児医療の充実は、これからの復興まちづくりの中核であると言っても過言ではないと思っております。

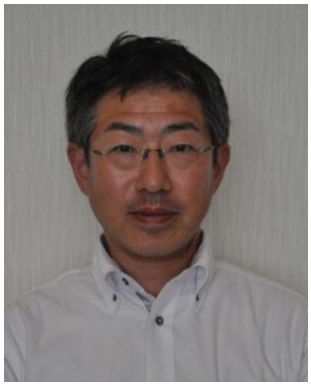
全国の医師の皆様におかれましては、被災地の事情を御考慮いただき、引き続き、

“ほそくながく”御支援のほどよろしくお願いいたします。

併せて、ぜひ一度、被災地にお越しいただき、復興していくまちの姿を御覧いただければ幸いに存じます。

最後に、本事業の実施に当たり、日本小児科学会及び日本小児救急医学会並びに日本小児救急医学会災害医療委員会東日本大震災継続支援ＷＧの関係者及び関係各位の御理解と御協力に対し、深く感謝いたしますとともに厚く御礼申し上げます。

2018.４.18



東日本大震災小児医療復興新生事務局代表

岩手県医師支援推進室　医師支援推進担当課長　多賀　聡

「平成 29 年度事務局を代表して」

東日本大震災小児医療復興新生事務局の窓口の代表と岩手県担当を務める、岩手県医師支援推進室の多賀と申します。

東日本大震災津波から６年７か月が経過しました。

これまで、全国から多くの医師の皆様のご理解をいただきながら、平成２８年度末までに岩手・宮城・福島の３県の支援対象施設に実人員で１７０名、延べ１，８４３日のご支援をいただきました。

この場をお借りして、被災地のために多くの医師の皆様に御支援賜りましたことにつきまして、改めまして深く感謝いたしますとともに厚く御礼申し上げます。

私が所属する岩手県では、一刻も早い被災地の復興を目指し、全国の自治体からの多くの支援職員の皆様のお力を借りながら、復興事業の総仕上げを視野に復興の先も見据えた地域振興にも取り組みながら復興を推進しているところです。

また、被災地の医療施設としては、各市町村の中核となっていた高田・大槌・山田の県立３病院が被災し、移転新築を余儀なくされたところでありますが、新しいまちの再生と歩調を合わせ、

既に大槌・山田の両病院は新築開院し、残る高田病院も今年度中に新築開院する予定で、現在開院の準備を進めているところです。
復興はもちろんですが、全国の地方共通の課題として被災地も同様に抱えている地域創生のためにも、岩手県の将来を担うこどもたちが安心して暮らし成長することができるよう、宮城県・福島県両県の御担当者と連携しながら、引き続き、全国の医師の皆様のお力を“ほそくながく”お借りしてまいりたいと思いますので、どうぞご支援のほどよろしくお願いいたします。
最後に、本事業にご協力いただいております、日本小児科学会及び日本小児救急医学会並びに日本小児救急医学会災害医療委員会東日本大震災継続支援 WG の関係者及び関係各位の御理解と御協力に対し、深く感謝いたしますとともに厚く御礼申し上げます。

2017.10.31

岩手県医師支援推進室　医師支援推進担当課長
東日本大震災小児医療復興新生事務局　第３代代表
福士 昭

「東日本大震災からの復興、そして地域の輝く未来に向けて」

岩手・宮城・福島の３県に未曽有の被害をもたらした東日本大震災。

あの日から幾年月が流れようとも、私たちの深い悲しみが癒えることはありません。

津波の被害により深い傷跡を残した被災地では、復興後の輝く地域の未来を見据えて、関係者が一丸となって全力で復興に取り組んでいます。

「奇跡の一本松」で知られる岩手県陸前高田市では、壊滅的な被害を受けた市街地全体を津波から守るための高さ 12.5 メートル、延長２キロにも及ぶ巨大な防潮堤が完成するなど、安全・安心の街づくりが各地で進められています。

また、地域で暮らす住民の皆さんの命と健康を守るため、全壊した県立大槌病院、県立山田病院の再建が完了し、新たに県立高田病院の建設工事が始まるなど、地域医療においても復興の歩みが着実に進んでいます。

一方で、被災地などでは、依然として深刻な医師不足が続いており、地域医療を取り巻く環境がさらに厳しさを増してきております。

このような中、この事業を通じ、全国の小児科医師の皆様からいただいた温かいご支援は、将来の地域の担い手となる子どもたちとそれを見守るすべての方々に安心感をもたらし、地域医

療の確保に奔走する医療関係者の皆さんをどれほど勇気づけたことか計り知れません。

　これまでの幾多にわたるご支援に対し、この場をお借りして厚く御礼申し上げるとともに、本事業を支えてくださる学会関係者や関係大学の皆様、関係各位のご尽力に対し、深く敬意を表する次第です。

　この事業で紡がれた被災地と全国の小児科医師の皆さんとの命の絆が、「ほそく　ながく」将来にわたって受け継がれ、さらにそれ支援の輪が広がり続けていくことを強く願っております。

　今後とも、被災３県の９病院・施設へのご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

2017.3.8

「東日本大震災から５年　～子どもたちの笑顔のために～」

平成 23 年 3 月 11 日。岩手・宮城・福島の３県に未曽有の被害をもたらした東日本大震災。あれから５年の節目の日を迎えました。

　あの日、あの津波は、私たちから、かけがえのない人や家族で過ごした大事な場所、思い出がいっぱい詰まった大切なものなど、全てを奪い去っていきました。そして、５年の歳月が流れた今でも、深い悲しみが癒えることはありません。

　津波の被害により深い傷跡を残した被災地では、街の復興と生活の再建に向けて槌音が鳴り響いていますが、まだまだ復興の途上にあり、今もなお、多くの方々が応急仮設住宅等での不自由な生活を余儀なくされるなど、被災者の生活は依然として厳しい状況におかれています。

　このような中、私たちに希望の光を照らし、子どもたちの笑顔を取り戻すために、救いの手を差し伸べてくれたのが全国の小児科医師の皆様による温かいご支援でした。

　これまでの幾多にわたるご支援に対し、この場をお借りして厚く御礼申し上げるとともに、本事業を支えてくださる学会関係者や関係大学の皆様、関係各位のご尽力に対し、深く敬意を表する次第です。

　この事業をきっかけに生まれた被災地と全国の小児科医師の皆さんと結ばれた命の絆は、あの日から５年が経過した今もしっかりと受け継がれています。そして、その支援の輪はさらに広がり続けています。

　これからも将来にわたって、子どもたちとそれを見守る全ての方々がそれぞれの地域で安心して健康で暮らせるよう、この事業が未来ある子どもたちの健やかな成長を支え、命をつなぐ希望の灯として、「ほそく　ながく」ともし続けていけることを強く願っております。

今後とも、被災３県の９病院・施設へのご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

2016.3.11

東日本大震災小児医療復興新生事務局を担当しております岩手県医師支援推進室です。

全国の小児科医師の皆様には、日頃から本事業の取組につきまして、御理解と御協力をいただき厚く御礼申し上げます。

これまでに全国の先生方からいただいた温かいご支援が、将来の地域の担い手となる子どもたちや、地域医療の確保に奔走する医療関係者の皆さんにとって、どんなに心強く、安心感をもたらしたのか計り知れません。

岩手・宮城・福島の３県に甚大な被害をもたらした東日本大震災からの復興事業も本格化し、岩手県では被災した県立病院の再建が順調に進められています。

これからも被災地をはじめ、それぞれの地域で、子どもたちや保護者の方々、住民の皆さんが安心して健康で暮らせるよう、この事業が未来ある子どもたちの健やかな成長を支え、命をつなぐ希望の灯として、「ほそく　ながく」ともし続けていけることを強く願っております。

今後とも、被災３県８病院・施設へのご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

2015.6.15

岩手県医師支援推進室　医師支援推進担当課長
東日本大震小児医療災復興新生事務局　第２代代表
高橋　幸代

東日本大震災小児医療復興新生事務局を担当しております岩手県医師支援推進室です。

全国の小児科医師のみなさまには、日頃から本事業へご協力をいただいておりますことに心から感謝を申し上げます。

特に、今年４月に日本小児救急医学会のみなさまへ「東日本大震災小児医療復興新生事務局　医師公募チラシ」を配布させていただいたところ、全国からたくさんのご支援のお申し出をいただき、感激しております。

被災３県８病院の各地域の子どもたちや保護者のみなさま、そして医療スタッフにとって、全国の先生方からのご支援は、本当に心強く、有り難い限りです。

今後も、この温かいご支援の輪が「ほそく　ながく」つむがれていくようにと願っております。どうぞ、これからもご支援の程よろしくお願い申し上げます。

2014.5.12

岩手県医師支援推進室

三田　崇雄

岩手県では、今回の震災により被害が大きかった沿岸部、特に気仙医療圏（大船渡市、陸前高田市、住田町）において、小児科を標榜する５施設のうち３施設が津波により全壊しました。このため、県立大船渡病院及び仮設の県立高田病院では外来患者数が急増しているほか、内陸の後方支援となるべき病院においても医師が不足し、全国からの支援を得ながら圏域の小児医療を維持している状況にあります。

これまで、日本小児科学会をはじめとして全国のみなさまからご支援をいただいておりますが、今後も継続して支援をお願いしなければならない状況にあります。

被災地の復興のために、是非医師の皆様のお力をお貸しください。ご連絡をお待ちしております。

2013.4.27